

令和 2 年 6 月 21 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2019

課題番号：18K12461

研究課題名（和文）第二外国語スペイン語の語彙・表現学習のための反転授業用動画教材に関する研究

研究課題名（英文）Study on Video Materials for a Flipped Classroom to Learn Vocabulary and Expressions in Spanish as a Second Foreign Language

研究代表者

中島 さやか（Nakajima, Sayaka）

早稲田大学・文学大学院・准教授（任期付）

研究者番号：40757043

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：外国語教育、特に少ない授業時間数など様々な制約の元に行われる大学の第二外国語教育の現場では語彙や表現を自然に近い形で学習者にわかりやすく導入することは容易ではない。本研究では、第二言語習得の研究成果を応用し、音声とイラストを用いた短い映像教材を開発して、翻訳や日本語の説明に頼らない形で目標言語を最大限活用しながら語彙や表現を導入する教授法を提案し、第二外国語の新しい言語教育法の推進に寄与した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、第二外国語を中心とする日本の大学のスペイン語教育の多くの現場に共通する、基礎的な語彙や表現の理解・習得不足の問題を緩和することを目的に、翻訳や説明に重点が置かれる傾向のある語彙や表現のインプットを、音声とイラストからなる短い映像形式のインプットに変え、スマートフォンやe-learningを通じて説明や演習を行う前に学習者に提供する教育法を考案し、学習者が難しいと感じる傾向のある学習項目をわかりやすく教えるための新しい教授法のモデル提案し、外国語教育の分野に貢献した。

研究成果の概要（英文）：Teaching staff of foreign languages, such as those in charge of conducting second foreign language classes at university in particular, often face difficulties in introducing a close-to-natural usage of vocabulary and expressions to learners in an easily understandable manner, due to insufficient class hours and various other constraints. This study, through application of the outcomes of studies on second language acquisition, developed short video materials with sounds and illustrations, proposing a new method of introducing vocabulary and expressions by making maximum use of the target language rather than relying on translations or explanations in Japanese, thereby contributing to the promotion of a new educational methodology for the teaching second foreign languages.

研究分野：スペイン語教育

キーワード：スペイン語教育 語彙習得 表現習得 反転授業 e-learning インプット 外国語教育 第二外国語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1. 研究開始当初の背景

日本におけるスペイン語の学習者は大学の第二外国語の学生が圧倒的多数であるが、第二外国語では少ない時間数やクラスあたりの人数の多さなど様々な条件等から文法を中心とするシラバスでカリキュラムが構成されていることが多く、教科書もそのために開発されたものが多い。文法中心のシラバスで行う外国語教育の難点の一つに、文法の進度に学習者の語彙や表現の習得が追いつかず、カリキュラムが進むにつれてコミュニケーション的な要素を取り入れるのが難しくなり、結果としてアクティブラーニングにつなげにくくなることがある。

外国語の語彙や表現習得の問題の背景には複合的な要因があるが、第二外国語のスペイン語教育における語彙や表現習得の問題については、教科書の内容の訳や説明に比重が置かれがちな導入の方法も一つの要因として関係している。近年は第二外国語の教科書にもイラストや写真、音声などが多く取り入れられるようになり変化してきているが、教科書で紹介できる情報は限られているため、より自然に近い、音声や場面を伴う形で語彙や表現を導入することは容易ではない。

映像の効果的な使用がこの問題の一つの解決策を提供すると考えられたが、数年前までは一般の教員が映像教材を開発し、学生に配布することは費用や技術的な理由等から非常に困難であった。しかし、近年のスマートフォンや e-learning システム、そして教育現場での反転授業の普及などの影響で、映像に関する専門知識を持たない教員でも映像教材を開発し、授業内外の時間に学生に配信することが可能になったため、語彙や表現の導入の問題にも改善の糸口が見えてきていた。

## 2. 研究の目的

上記の問題意識に基づき、本研究は次の4つを目的として行われた。1. インプットに関する研究<sup>1</sup>やフォーカス・オン・フォーム<sup>2</sup>等を中心とする第二言語習得の研究成果を応用し、第二外国語のスペイン語教育の現場で使用可能な、語彙や表現を導入するための映像教材を開発する。2. 第二言語習得のプロセス<sup>3</sup>を考慮したうえで、実際のスペイン語の授業プログラムの中で、開発した映像教材をどのタイミングでどのように使用するのが効果的であるかを検討する。3. 教材を使用した学習者へアンケート調査を行い、得られた結果をもとに開発した教材の有用性や難点、効果的な使用法について分析する。4. 語彙や表現導入のための映像教材の開発モデルとその使用法として、新しい教育実践と方法を外国語教育の分野に提案する。

## 3. 研究の方法

研究は以下の流れで行われた。1. 初級スペイン語教育のプログラムの中から日本人学習者にとってわかりにくい表現の項目を選定する。2. 外国語教育における映像教材の使用やインプットに関連する書籍、論文、そしてスペイン語教育の国際学会や国内の研究者・教育者が集まるワークショップで得られた様々な提案を参考に、開発する教材に必要な要素を特定する。3. 場面やイラストのわかりやすさ、視覚的補助の有無、新出語彙の量、教材に出現する学習項目の繰り返しやパターンの変化、音声の速度、映像の長さ他、様々な要素を考慮して映像教材を作成する。4. スペイン語教育の専門家に教材に関しての助言を得る。5. 第二言語習得のプロセスに加えて第二外国語のプログラム全体や目標言語の使用量なども考慮し、スペイン語教育のプログラムの中での教材の効果的な使用を検討する (e-learning 及びスマートフォンを利用したインプットのタイミング、提供の方法等を含む)。6. 教材を実際の教育現場で使用した後、学習者を対象に教材の内容や使用法等に関するアンケートを実施する。7. 得られた結果をもとに教材の有用性・利点・難点を分析する。8. 新しい外国語教育の教育実践・方法として提案す

<sup>1</sup> インプットに関する研究は Krashen の著名なインプット仮説以降の主要な研究を参考にした。

<sup>2</sup> フォーカス・オン・フォームの定義は様々であるが、本研究は和泉の著作(2009)及び(2011)の定義「意味内容とコンテキストがある言語使用を中心とする授業の中で、必要に応じて学習者の注意を言語形式に向けさせていき、言葉の形式・意味・機能のつながりの構築を効果的に助けていく指導方法」に基づいており、そのための指導を可能にする映像教材の開発と使用法を検討した。(和泉伸一『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』東京、大修館書店、2009 及び「第二言語習得研究からみた CLIL の指導原理と実践」『CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』東京、上智大学出版、2011)

<sup>3</sup> ここでの第二言語習得のプロセスとは、「インプット(input)→気づき(noticing)→理解(comprehension)→内在化(intake)→統合(integration)→アウトプット(output)」の流れを指している。(フローチャートは廣森友人『英語学習のメカニズム 第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法』大修館書店、2015 に基づく)

る。

教材開発・教材の使用・アンケート調査は研究代表者が勤務していた上智大学と明治学院大学で行われ、研究代表者の機関変更後は早稲田大学でも研究が継続された。また、e-learning については各大学の LMS が使用された。

#### 4. 研究成果

本研究の問題設定に基づき開発された、日本語訳や説明を伴わない形式の映像教材、及びその教材を用いて語彙や表現を導入する指導法については、非常にわかりやすく学習に有用であると学習者から高い支持を得ることができた。特に高く評価されたのは「感覚的にとらえられる全体的なわかりやすさ」「場面・音声・意味の結びつけやすさ」「学習すべきポイントが特定できること」等の側面であり、多くの学習者が視覚と聴覚を同時に用いて学ぶメリットを指摘した。このことから、一定の語彙や表現を場面と意味が結び付けやすい形でイラストと音声を用いて導入する映像教材を開発し、その使用を教授法の一つとして提案するという当初の研究目的は達成することができたといえる。

しかしながら、一連の指導の流れの中で用いる教材の「テキスト表示」等の詳細については、今後さらに検討が必要であると考えられる。理由を以下に記す。

教材はスペイン語のテキスト表示があるものかないものの二種類が用意され、表示がないものが最初の導入用として使用され、表示があるものが授業での演習後、学習事項の確認用として使用された。最初にテキスト表示がない映像を使用したのは、インプットをより自然な状態に近づけ、文脈から意味をとらえる訓練を行うこと、及び学習者の意識が文字を読むことに向いてしまい、実際の発音やイントネーションに十分注意を払わないまま、不自然な読みや発音で表現を覚えてしまうことを避けるという理由があった。しかし学習者の多くから、最初にテキストがある映像を使用したいとする意見がよせられた。

また、研究では説明や演習を行う前の段階で行うインプットを最も重要と位置づけ、その段階で自然に近いインプットを行うことを意図して指導の流れが作られたが、実際には学習者はそれぞれの学習スタイルや自分自身の学習上の段階や用途に合わせて、映像教材、教科書やプリント等の紙媒体の教材、e-learning 上の電子媒体の教材などを自由に使用したインプットを自ら行っており、本研究で開発した教材に関しても、学習者は最初の導入以外にも、聞き取り演習用、授業での学習後の理解度の確認用、試験前の復習用としての使用等、学習の様々な段階でそれぞれの用途に合わせた様々なインプット用として使用していた。そしてその中で「あるとよい」と感じるテキスト表示やターゲット項目に関する理解の確認を行うための母語による補助的な情報の有無など、学習者によって異なる学習上の要素もあることが調査で明らかになったため、今後はそのような側面を考慮し、教材に含まれる個々の要素やそれらの導入のタイミングについてさらに視野を広げた研究が必要であると考えられる。

本研究で開発した教材は e-learning を通じて配信し、スマートフォンでも視聴可能にしたことにより結果的に、多様な学習スタイルを持つ学習者に対して、映像教材単体、あるいは教科書やプリント、e-learning 上の教材など、別の媒体の教材と自由に組み合わせて学べる学習上の材料を与えることになり、学習者のインプットの選択肢を増やしてより幅広い学習の手段を提供することにつながった。

以上のことから、本研究は全体として第二言語習得の研究成果に基づく教材開発の例、そして e-learning やスマートフォンを用いた提供の方法も含めた、語彙や表現の指導のための一つの新しい教授法のモデルを外国語教育の分野に提案することができたといえる。提案したモデルは、教科書を用いて行う第二外国語教育のスペイン語教育を補う教授法であり、従来の文法シラバスに基づく教授法の学習効果を高めることにもつながる補助的な性格を持つ方法である。

本研究の問題設定、教材開発上考慮した項目、教材で用いたテキストやイラストの例、実際の使用法の例、使用後のアンケート調査の集計結果や分析などの情報は二点の論文にまとめられ、明治学院大学の紀要で発表されており、大学のリポジトリを通じて一般に公開されている。

また本研究の一環として研究代表者は、スペイン語教育の国際学会である ASELE (La Asociación para la Enseñanza del Español como Lengua Extranjera) の第 31 回大会において、この研究の問題設定の一つである日本の大学の第二外国語のスペイン語教育における目標言語使用とインプットに関して問題を提起し、日本の学生が置かれている言語的な条件、第二外国語教育の制度的な制約、そして教員や学生の言語観や学習者の学習スタイル等、教育現場での言語使用に影響を与える様々な要因を分析した上で、映像を含む e-learning のツールをサポートとして使用しながら、ノンネイティブの教員が現場で目標言語を最大限に使用し、自然に近いインプットを増やす教育法を提案した。提案された教育法は、研究代表者が上智大学で行った実践と、学生を対象に行ったアンケート調査の分析結果に基づいたもので、最低 3 か月から 6 か月以上の目標言語の継続的な使用を想定する中長期的な教育法であるが、言語や文化的な条件が類似している東アジア地域で教育活動を行う研究者及び教員を中心に、教育現場の実践に応用できる有効な

教授法として支持を得ることができた。

本研究についての国内の学会発表が 2020 年 5 月、CANELA 日本・スペイン・ラテンアメリカ学会の第 32 回大会で確定していたが、新型コロナウイルスの影響で大会が中止となった。学会では国内の教員や研究者向けに、研究によって開発された教材の特徴や使用方法、期待される教育効果などに加えて、未発表の映像教材も紹介される予定であったが、実施がかなわなかったため、学会活動再開後に改めて情報共有のための活動を行うことが課題として残されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 中島さやか	4. 巻 13
2. 論文標題 初級学習者向け「hay」のインプット用映像教材と授業における使用例	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 カルチュラル	6. 最初と最後の頁 101, 112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中島さやか	4. 巻 14-1
2. 論文標題 体調・感情の状態を表すスペイン語表現のインプットのための映像補助教材	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 カルチュラル	6. 最初と最後の頁 87,104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Sayaka Nakajima
2. 発表標題 El uso de español como lengua de instruccion en las clases de ELE por docentes no hablantes nativos en el contexto universitario japones
3. 学会等名 30 Congreso Internacional de ASELE 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sayaka Nakajima
2. 発表標題 La utilizacion de videos cortos como material complementario para las aulas de ELE como segunda lengua en Japon: el primer input y el repaso（発表は確定していたが新型コロナウイルスの影響で学会中止）
3. 学会等名 XXXII Congreso de CANELA（発表は確定していたが新型コロナウイルスの影響で学会中止）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

機関リポジトリのアドレス

<http://hdl.handle.net/10723/00003600>

<http://hdl.handle.net/10723/00003874>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----